

によつて自己が救はれ、然して化他時に普遍すること肝要なれど、さにあらず前述の如き傾向なり。かゝる現象は罪人が教誡師を説教するにも似たり。吾々の尊敬する人物はかゝる者に非ず。法華經的情念の下に且夕を思惟活動する人こそ欲すれ吾々は此所に社會的宗教を提示するなり。我々教團人の理想は佛國土の實現、本門戒壇の建立にあり。基督教に於ける神の國の顯現、之等の理想は社會進化的にして其の主旨は慈悲、博愛等の統一の宗教の建立を期とせり。

日蓮の教判釋に於ける根本思想は

- 知レ教 (宗教哲理的研究)
- 知レ機 (個人應化的研究)
- 知レ時 (時代應化的研究)
- 知レ國 (國性應化的研究)
- 知レ序 (宗教進化的研究)

かゝる知判に於て前四判は后一判に其の意義の總括たるものなり。此の五義に仍つて佛教最高の眞理、末法救済の要法たる壽量品文底の妙法五字を宗教的に建立して三開して三大秘法の内容となすなり。即ち圖解せば

- 本尊 — 壽量本佛 — 本果妙
- 三大秘法 — 一 題目 — 耳口意三業の妙行 — 本因妙
- 戒壇 — 國家的建立 — 本國土妙

要するに日蓮の主義は日本國は道義的建國にして正法を擁護し世界の道法的統一をなすべき天業ある國なるを自覺し皇室と人

民と一同に此の法に歸したる時、勅宣に由りて世界統一の本門戒壇を建立して國家を以て直ちに宗教的團結とし以て、宗教に實際の統一力を有せしめ各國家の道法的中心統一を期するものなり。

吾々は此所に教は教權的正教的、思想は統一的中心的、信仰傾向は現實的實行的、教化の方式的折伏的國家的、目的は世界の攝化、中心人格は心理、説法の教主としては佛陀と顯れ、唱導の師としては日蓮と現じ、戒壇建立の願主として賢王と生れかゝる世界的宗教の傳道者たるべき我々は今此所に私利私慾に走る徒輩を速に蹴放し、王佛冥合の理想を實現すべく、自覺奮起を希望するものである。(十三、十一)。大泉精舎ニテ)

## 世界と日蓮

村田海仙

「中馬巷に蔽れ骸骨路に充てり、死を招くの輩既に大半を超え之を悲しまざるの族敢て一人も無し。屍を臥せて觀と爲し、尸を並べて橋と作す」とは宗祖御在世當時の有様を説かれた安國論の一説である。之れ正法地に墮ち邪法天下に蔓延せる故にして、されば三災四劫を離出すること能はず、斯様な穢世を現出するに至るのである。

法と國とは体と影の如しと言ふ。かゝる鎌倉時代に於て人心

に原動力たる宗教や如何に。これを安國論に「或は利劍即是の文を專として西主教主の名を唱へ、或は衆病悉除の願を待みて東方如來の經を誦し、或は病即消滅不老不死の詞を仰いで法華經眞實の妙文を崇め、或は祕密眞言の教に因つて五瓶の水を灑ぎ乃至然りと雖も單肝膽を摧ぐのみにして彌鐘疫に逼る」と破せられる如く諸宗混沌たる邪惡の坩堝の中に但自が醜汚な姿を曝け出して互ひに醜き鬭争を逞しふするのみであつた。善神國を去りて安からず、國は戰亂の巷、天變地天の餌と化したのである。宗祖爲に之の迷網に縛せられたる國家を救濟せんとして奮然蹶起し破邪顯正、舌端火を吐いて法華經を弘通せられ日本國を法華經化せんと努力せられたのである。

憶ふに日本國は法華經の國である。宗祖によりて眞に日本國の法華經性の本地が顯發せられ、それが原動力となつて日本乃至月氏漢土一圓浮提を一字とする活動が一層克明となつたのである。宗祖、日本國の法華經性を開顯し非滅の滅を洗足の郷に示されてより茲に星霜轉じて六百有餘年、今や八紘一字、妙法廣布の實現のため東洋平和を攪亂する暴支政府に對して一大鐵槌の全面的積極的而強毒之の大膺懲を加へて居る。即ち日本國の體内に躍動せる大日蓮の息吹きがかくさせたのである。「日蓮によりて日本國の有無はあるべし」之れ宗祖の誇大的言辭に非ずして金言である。故に私は謂ふ「日本國とは日蓮なり」と。斯くて今時事變を鑑へる時「汝(支那)早く信仰の寸心(亦化、英化の偏心)を改めて速に實乘の一善(日本八紘一字の精神)に

販せよ」との日本より支那政府に與へたる大警鐘である。この警鐘は終には平和の女神の鳴らす樂土建設の梵鐘の音となるのである。この鐘に和を得たる者、滿洲あり、獨逸あり、伊太利あり。日本は世界のリーダーとして、良きタクトを振る者として、絶對の存在である。故に謂ふ「世界とは日本國なり」と。然るに一度視界を轉じて國內の現状を眺むるに、何ぞ。果して本化同心たる日蓮の二字に包含せられて居るでふか。思想に於て赤化共產あり歐米禮讚あり、無政府主義あり等々國民の思想混亂し、且つ之等危き人心化導の任ある宗教に於て淫祠邪教の勃興は恰も雨後の筍の如く、一旦壞消すと雖ども餘蘖ありて猶強し。又關の東西に於ける水難禍、暴嵐、甚しきは下剋上の風さへも見えるに至る。撰時鈔の「日月に變あり大風と大雨と大火等出來し次には内賊と申して親類より大兵亂起り我方人しぬべき者皆打失ひて後には佗國に攻められて乃至是れ偏に佛法を亡し國を滅す故なり」とは昔の事に非ずして現在の如くにも思はる。茲に於て思ふに歴史は轉じて六百有餘稔を隔つれども世相に於て昔と未だ大差なきを痛感せざるを得ない。然し文化の發展は益々世相を繁雜ならしめ機械の進歩は人をして宗教的思索の餘猶を奪ふ。爲に佛法を亡して國滅せんとす、怖しき哉。

暴支膺懲の矛、武漢三鎮の堅盾を破ると雖も長期抗日の焰未だ息まずして威あり。我國の國民精神總動員は混沌たる思想を統一して唯皇道國體主義のみ巍然たるに至るは欣喜の極みであ

る。茲に於て精神總動員の原動力は大日蓮の息吹の顯揚、即ち日蓮によりて開發せられた日本の法華經を益々發揮せしむるにある。之吾等門徒の大使命である。「日本とは日蓮なり」の信念は其儘吾等の信念としなければならぬ。そして萬民一同に南無妙法蓮華經と唱へしむるこそ眞の總動員であり、世界の軸心たる日本の使命は建設されるのである。ここに於て叫ぶ。八紘一宇正法廣布の理想を有する法華經徒の奮起や今正に是の時なり蹶起せよ！

最後に私は謂ひたい。世界の軸心は日本にあり日本の軸心は日蓮にあり、されば世界とは日蓮なり、之又吾等の信條に非ずして何ぞ！と。

## 落葉斷想

畑 嬌 作

落葉、それは目に見えぬ季節を秋から冬へと誘ふ傳達者だ。落葉には何か言ひ知れぬ淋しきがある。その淋しさに私は愛着を持つ。秋は落葉と俱にある。

静かな秋の夜獨り机にもたれて、忍びよるやうな落葉の風にころがる音を聞く。消えるともなく消え起るともなく起る音。落葉の秋はここにもあると思ふ。

夕映えの空に亭々と聳える山道の銀杏の黄葉、夕陽に輝きな

がら散る落葉。山路に敷きつめた黄金色は黄昏れてあたりが暗くなつても明るい。その明るさ、私はそれに淋しきを感じる。

落葉の秋はここにもあると思ふ。

朝霧罩めた山に點綴する紅葉、霧は紅葉の奥深さを教へてくれる。そして落葉には霜がさむく／＼と白い。落葉は眞赤だ。落葉の秋はここにもあると思ふ。

叱られて背戸に出て涙をふいて居た夕方、裏山に散る落葉を如何に寂しく思つたことか。山鳩が啼いて居たつけ。落葉は私の涙より多かつた。落葉の秋はここにもあると思ふ。

庭の落葉を掃いて焚く朝、太陽は霧の中だ。霜にぬれた落葉の煙が白く上る。落葉の秋はここにもあると思ふ。

風が吹かれて路に舞ふ落葉。夜の闇に人の足音とまがふ落葉。空に舞ひ地ところがる落葉。落葉の秋はここにもあると思ふ。

山影路の埋もれた落葉の中に、コホロギが消ぬがに鳴いて居る。私はその寂寥さを好む。コホロギの聲が落葉を寂しく思はせるのか、落葉がコホロギを寂しくするのか、それは知らない。唯落葉に感じた秋の淋しさが一層この時深く感ぜられる。落葉の秋はここにもあると思ふ。

一葉、一葉散る毎に秋の消息を絶つ落葉、然し私の落葉に對する愛着は盡きない。又盡きたくないのである。落葉、落葉。